

## 令和3年度愛宕山古墳発掘調査成果報告

さきたま史跡の博物館 史跡整備担当  
吉田修太郎・宮原正樹・ナワビ矢麻

### 1 はじめに

埼玉古墳群は大宮台地北端部の独立した台地上に存在し、大型の前方後円墳が主軸を揃え東西500m・南北800mの範囲内に密集する全国でも稀な景観をもつと共に、国宝金錯銘鉄剣の出土など、学術的な価値も認められて令和2年3月に特別史跡に指定されている。

愛宕山古墳は、大型の古墳が南北に連なる埼玉古墳群の中でも中央西寄りに位置し(図1)、瓦塚古墳や奥の山古墳と同一の方位軸をもつ前方後円墳である。墳長は54.7mで埼玉古墳群内最小の前方後円墳である。築造年代は、かつて方形透孔をもつ円筒埴輪が出土した共通点から、二子山古墳とほぼ同じ時期である6世紀半ばとされてきたが、円筒埴輪の研究が進んだ現在では、將軍山古墳と同一の6世紀後半とする説が有力である(城倉2011)。

愛宕山古墳は、過去に2度発掘調査が行われている。いずれも昭和56年度であり、まず埼玉県教育委員会が史跡範囲確認調査を目的に前方部南東域・後円部東域の調査を実施し、その後行田市教育委員会が道路工事に伴う記録保存のための発掘調査を行っている。これら調査の結果、二重の方形周堀であることが判明している。

史跡整備については、兆域が指定地外に及んでおり、他の古墳と比較しても遅れている。そのため、愛宕山古墳の適切な保存と活用を図るべく、令和2年に発掘調査3か年計画を立案し、令和4年3月策定の『特別史跡埼玉古墳群整備基本計画』において示した。その調査の目的は、1年目は墳丘の西側及び墳丘造出し、中堤、周堀の遺存状況、2年目は前方部南側、中堤、周堀の遺存状況、3年目は後円部北側、中堤、周堀の遺存状況を明らかにすることである。この計画を基に、約40年ぶりに発掘調査を行うことになり、3か年計画の1年目として、令和3年度に古墳西側を中心に調査を実施した。

本報告は令和3年度愛宕山古墳発掘調査の概報である。なお、本調査は、令和3年度の埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業として実施した。

### 2 既住の調査及び整備工事

埼玉県は、文化財保護委員会の「風土記の丘」建設構想の提言を受け、昭和42年に埼玉古墳群を中心とした「さきたま風土記の丘」建設事業を開始した。それに伴い、各古墳の適切な保存・活用を図るため、正確な遺構の情報を得る目的で発掘調査が進められてきた。

愛宕山古墳についても、昭和56年度に埼玉県教育委員会を調査主体として東側・南側エリアの範



図1 愛宕山古墳の位置

囲確認調査が実施された（さきたま資料館 1985）（図 2）。調査面積は、前方部南側調査区で約 560㎡、後円部東側調査区で約 140㎡である。

前方部南側調査区では、内堀・中堤・外堀を検出し、二重の方形周堀であることが確認された。内堀の幅は、検出面で約 7.6 m、深さは 50～70cm ほどで堀底面は約 6.2 m である（最も狭い部分で 5 m）。中堤の幅は、前方部南面で約 6.7 m となり、東側側面は約 4～4.8 m であった。盛土の痕跡はなく、検出面はすべて平面である。外堀は、南辺は幅 5.6 m 以上あるが、東辺は 2～3 m ほどであり、南辺は東辺の倍の規模をもつ。東辺はわずかに墳丘側に振れており、内側に向けて弓なりにカーブする形状をとっている。深さは南辺で 60～70cm、東辺は 45～70cm であった。

その他の遺構としては、溝跡が 5 基、井戸跡が 4 基、土坑が 4 基検出されている。内堀内で検出された遺構は、内堀と同一の覆土で、性格は不明であるが、内堀の埋没が始まる前に存在していたとみられており、内堀の開削と何らかの関りをもっていた可能性が指摘されている。また、外堀と平行しかつ、先行する溝跡も確認されている。それ以外の遺構は、古墳時代のものではない。

後円部東側調査区では、内堀の北辺が東辺と直交する位置を確認できたため、周堀の平面形が長方形であることが確定し、同時に前方部南側調査区の成果及び後述の行田市教育委員会の調査結果とあわせて、内堀の全長が約 67.5 m になることが判明した。調査区中央部の内堀は、幅約 6.5 m 検出されており（最短部で約 5.5 m）、深さは外側で 36cm、内側は 10cm であり内側に近づくにつれ浅くなる。科学分析調査から内堀はわずかに滞水する湿地的環境であったと推測されている。その他の遺構としては、溝跡が 5 基・井戸跡が 1 基検出されている。いずれも愛宕山古墳築造以降の遺構である。

次に遺物についてであるが、埴輪は中堤上での出土例はなく、外堀よりも内堀から多量に埴輪が出土しており、古墳築造当初は中堤の内堀側に並べられていた可能性が高い。円筒埴輪が圧倒的に多いが、わずかながら形象埴輪も出土している。円筒埴輪は 3 条突帯 4 段構成と（A・B 類）、多段構成の大型品（C 類）の 3 パターンのものが出土している（分類は過去の報告書（さきたま資料館 1985）による）。出土分布から前方部南側調査区では A 類が多く、後円部東側調査区では B 類の出土が多いため、種別毎に並べられていた可能性がある。形象埴輪は蓋形埴輪、大刀形埴輪、人物埴輪の帯刀する刀部分、家形、馬形、弾琴人物埴輪の琴の部分が出土しており、ほとんどが後円部東側調査区からの出土である。他の古墳は器財・形象埴輪の多くが墳丘西側で出土していることからすると、墳丘東側から出土する愛宕山古墳は異質である。土師器・須恵器はいずれも小片であり、須恵器は甕の体部破片が数点あるのみである。

続けて行われた行田市教育委員会の調査では、内堀・中堤・外堀を検出し、その他の遺構としては、溝跡が 5 基・土坑が 1 基確認された。調査面積は 270㎡である（図 2）。このときの調査では、内堀の北辺が確認され、その全長が確定している。また、調査範囲内で検出された内堀の深さは旧表土からの掘り込みで 40cm ほどであった。後円部東側の中堤幅は約 7 m であり、この調査では外堀幅の全体は検出されなかったが、深さは約 45～70cm であった。

出土遺物は、円筒埴輪が内堀よりの中堤上から倒れこむ形で多量に出土していること、外堀からは器財・形象埴輪が出土していることから、中堤内側には円筒埴輪、外側には器財・形象埴輪が並べられていた可能性が指摘されている。埴輪は中堤上では確認されず、原位置を保つものは存在しなかった。円筒埴輪は 3 条突帯 4 段構成がほとんどであり、県報告書（さきたま資料館 1985）の分類でいうと、A 類・B 類・C 類全て出土しているが、B 類が一番多い。他にも方形透孔をもつ個体や朝顔形埴輪も出土しており、形象埴輪では、武人埴輪の頭部や首飾りをつけた人物埴輪の胴部、馬形埴輪、器財埴輪の破片も多く出土している。

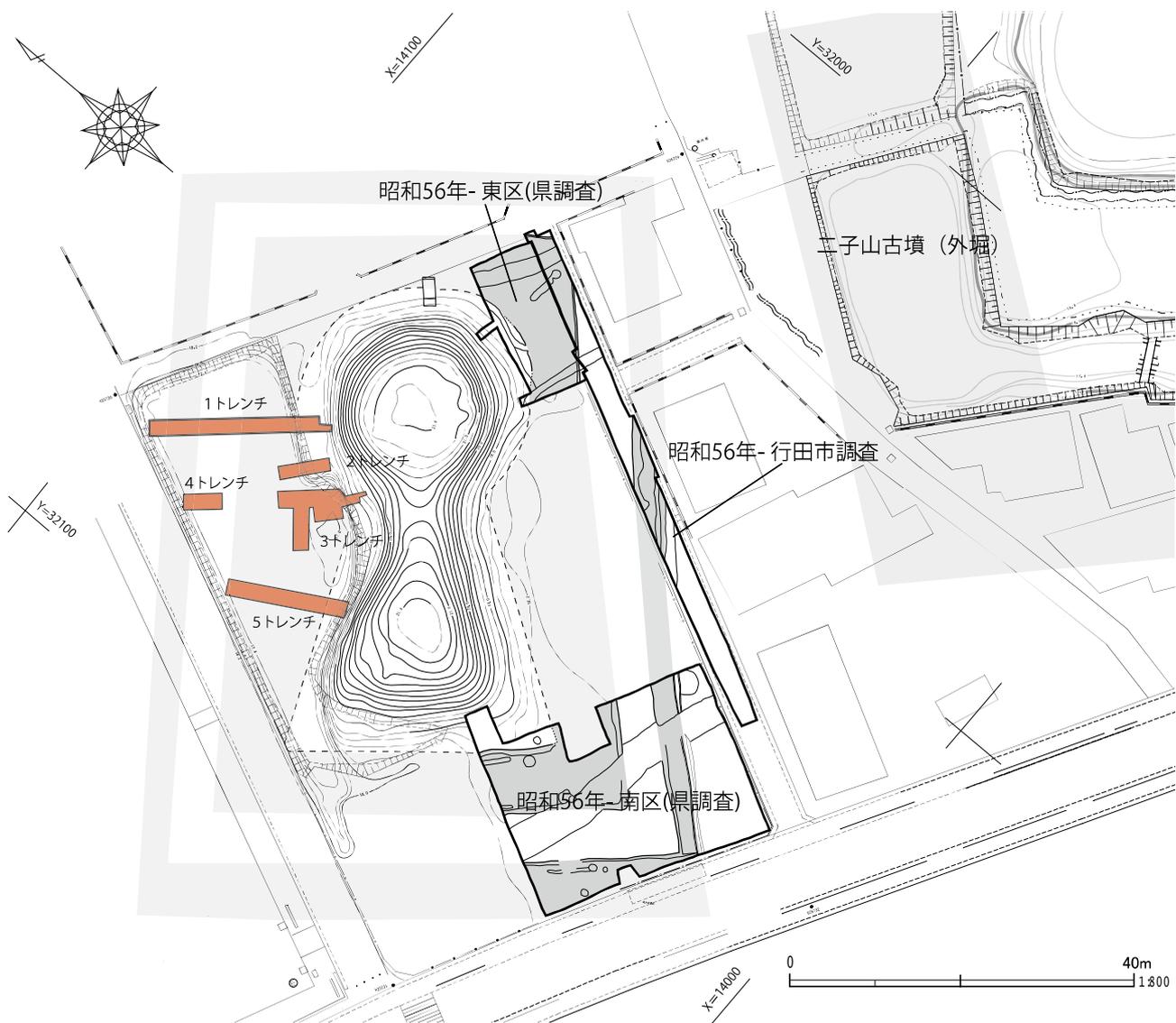


図2 令和3年度愛宕山古墳発掘調査 トレンチ配置図

元来、埼玉古墳群では小型の前方後円墳は盾形の周堀をもつといわれ、愛宕山古墳もその可能性が指摘されていたが、昭和56年度の調査で長方形の二重周堀であることが明らかになった。また、古墳の範囲が指定地外にまで及んでいることも発掘調査によって明らかになった。

その後の愛宕山古墳に関する研究で特筆すべきは、円筒埴輪の検討である。刷毛目の同一性から鴻巣市生出塚窯跡21・22号窯で製作された円筒埴輪が將軍山古墳と愛宕山古墳に供給されていることが確認され、愛宕山古墳の築造時期が6世紀後半に位置付けられる可能性が高まっている（城倉2011）。

愛宕山古墳の発掘調査は、上記の2回のみであり、整備事業も行われていない。埋葬施設についても未調査であり、墳丘には盗掘を示すようなくぼみや石材・副葬品が出土した等の知見もない。また、墳丘西側は菖蒲畑として利用され大きく削平を受けており、墳丘造出しの存在も現地地形からは確認できていない。

### 3 令和3年度の発掘調査

愛宕山古墳は、冒頭でも述べたように3か年計画の1年目として、令和3年度に約40年ぶりに発

掘調査を行うことになった。調査に先立ち、非破壊で埋葬施設の状況などを把握し、発掘調査を行う上での基本情報を得る目的で、早稲田大学とさきたま史跡の博物館により、3次元測量・GPR調査を実施した。3次元測量・GPR調査の詳細は、『早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所デジタル調査概報第4冊：埼玉県行田市 埼玉愛宕山古墳の測量・GPR調査第4集』（2022年）に譲り、ここではその結果のみを簡略に示すことにしたい。

3次元測量調査では、墳丘西側部分が大きく削平を受け崖状になっている状況が記録され、墳丘造出しの存在も確認できなかった。GPR探査では、①後円部墳頂に埋葬施設の反応は確認できなかったこと、②後円部東南に横穴式石室の可能性がある反応があったこと、③前方部鞍部に竪穴系埋葬施設の可能性がある反応がみられたこと、④墳丘造出しは削平されている可能性が高いこと、⑤前方部東南側で中堤の一部の反応がみられたこと、が結果として得られた。この3次元測量・GPR調査の結果は、今後の発掘調査をする上で、調査区の設定などの根拠になると考える。

令和3年度の発掘調査の目的は、愛宕山古墳西側の周堀・中堤・墳丘造出しの確認、墳丘土の堆積状況の確認であった（図2：トレンチ配置図）。調査主体はさきたま史跡の博物館で、史跡整備担当の3名（宮原正樹・ナワビ矢麻・田邊えり）が担当し、令和3年10月28日から令和4年2月28日の約4か月間で実施した。5箇所のトレンチを設定したが、各トレンチとも表土から50cmほどの掘削で検出面（地山）に達した。遺構としては、溝状遺構が4基（SD-1～4）、土壇が1基（SK-1）検出され（図3）、墳丘盛土及び旧表土についても確認することができた（図14・15）。

以下では検出された遺構や遺物について詳述するが、本稿末尾に掲載した写真を適宜参照されたい。なお、遺物写真の縮尺は、全て1/2である。

### 3-1. 検出された遺構について（図3～15）

#### (1) 遺構

・SD-1（図4・6・8）（遺構写真3・6・10・11・12）

SD-1は1～3トレンチにまたがり南北方向にはしる溝状遺構である。溝の上端幅は1・2トレンチでは約135cmで、3トレンチでは約80cmになり南に行くほど狭まり、3トレンチ内で溝跡は途切れていた。下端幅は1トレンチ内では約40cmで、3トレンチでは約70cmになる。深さは1トレンチで約100cm弱、3トレンチになると約50cmとなり、遺構幅と連動して浅くなる。2トレンチにおいては、平面プランの確認のみで掘削は行わなかった。また、3トレンチで近代のSD-2に切られる。

遺物としては、円筒埴輪片が最も多く、形象埴輪片、須恵器片、緑泥石片岩や角閃石安山岩がいずれも少量出土している。他にも3トレンチでは、上層から被熱を受けた粘土塊が多量に出土しているが、SD-1に属する遺物として捉えられるか疑わしい。形象埴輪としては、1トレンチの覆土下層から動物埴輪の脚部が出土している（遺構写真5）。須恵器では、3トレンチで櫛描波状文をもつ須恵器片の頸部（遺物写真51）や平安時代の須恵器坏底部（遺物写真55）が出土している。このように、SD-1に伴う遺物で明らかに新相と位置付けられる遺物は存在しないため、古代以前の遺構である可能性が高い。しかし、溝の範囲が墳丘想定ラインよりも内側に入っており、墳丘を切る可能性が高いので、古墳時代に属する溝と捉えることはできない。

・SD-2（図8）（遺構写真11・13）

SD-2は3トレンチで検出された東西方向に延びる溝状遺構である。溝の上端幅はC-C'セクション図（図12）で約270cmであり、D-D'セクション図（図13）で約220cmになるので、西にかけて広がる。下端幅は約170cmで、深さは80～90cmである。本遺構はSD-1を切り、SD-3

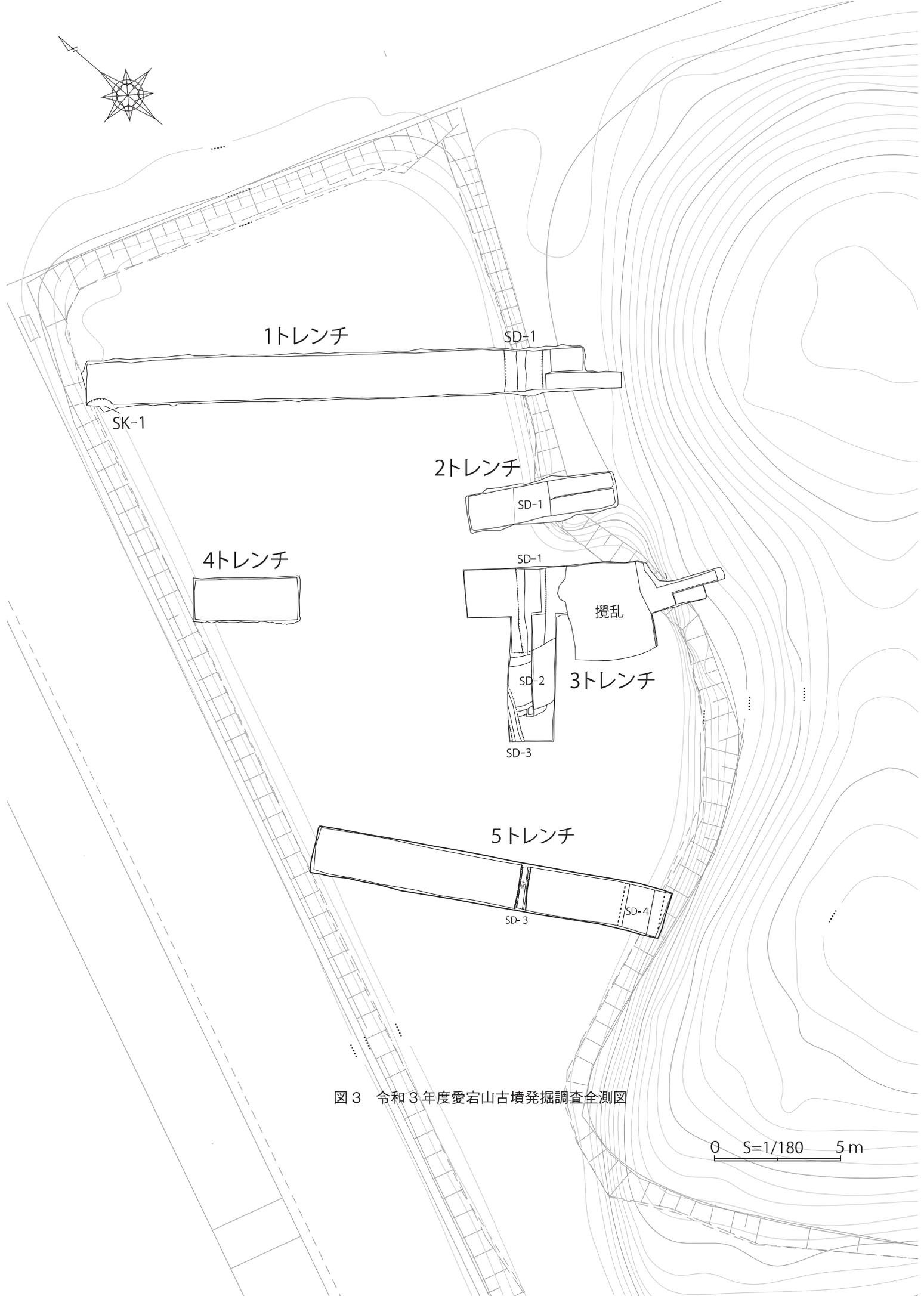


図3 令和3年度愛宕山古墳発掘調査全測図

0 5=1/180 5m

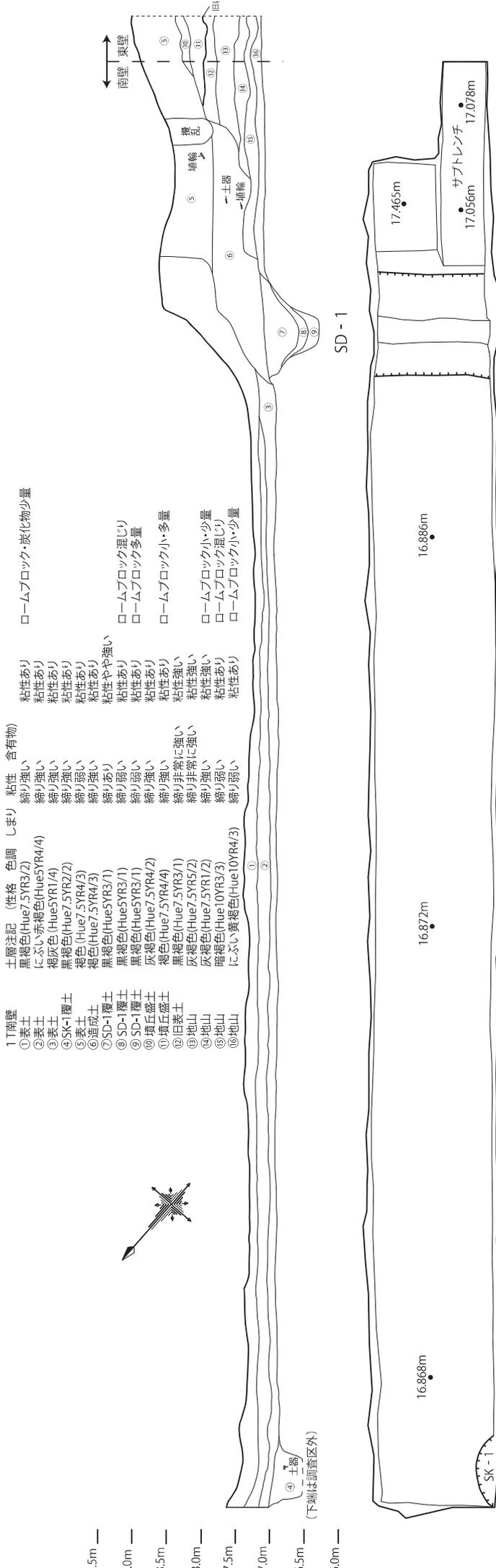


図4 1 トレンチ 平面図及び南壁・東壁断面図

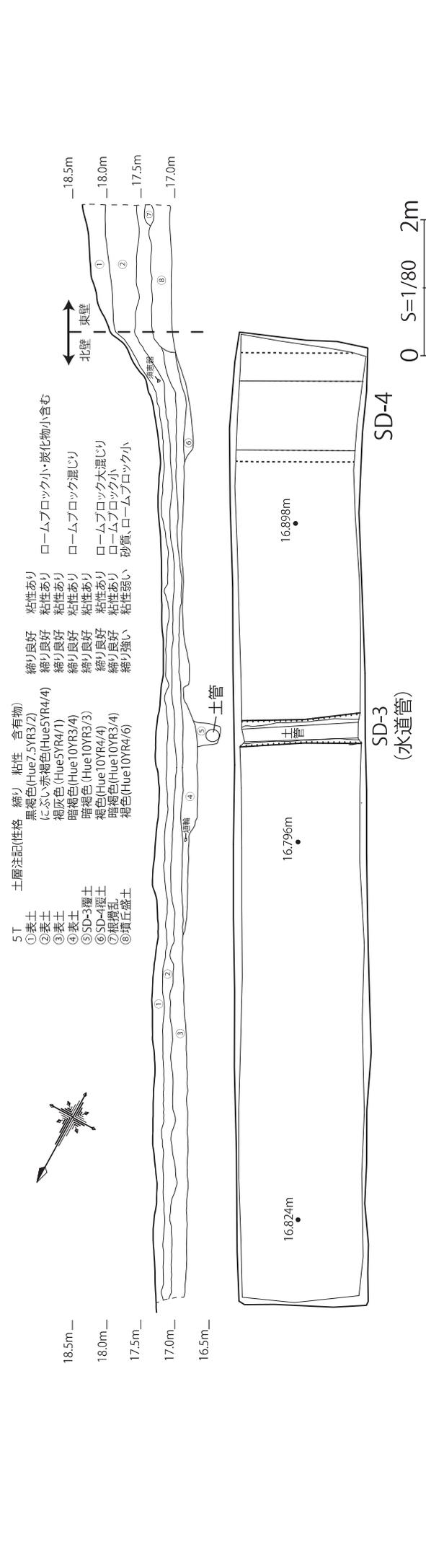


図5 5 トレンチ 平面図及び北壁・東壁断面図

2T北壁	土層注記(性格 色調 締り 粘性 含有物)		
①表土	黒褐色(Hue7.5YR3/2)	締り良好	粘性あり
②表土	にぶい赤褐色(Hue5YR4/4)	締り良好	粘性あり
③表土	にぶい褐色(Hue5YR4/1)	締り良好	粘性あり
④攪乱	にぶい褐色(Hue7.5YR4/3)	締り弱い	粘性弱い
⑤表土	褐色(Hue7.5YR4/3)	締りやや弱い	粘性あり
⑥SD-1覆土	黒褐色(Hue5YR3/1)	締りあり	粘性やや強い
⑦地山	灰褐色(Hue7.5YR5/2)	締り非常に強い	粘性強い
⑧地山	暗褐色(Hue10YR3/3)	締りやや弱い	粘性あり

ロームブロック小・炭化物小含む  
埴輪・瓦多量出土  
ロームブロック小混じり  
ロームブロック少量混じり

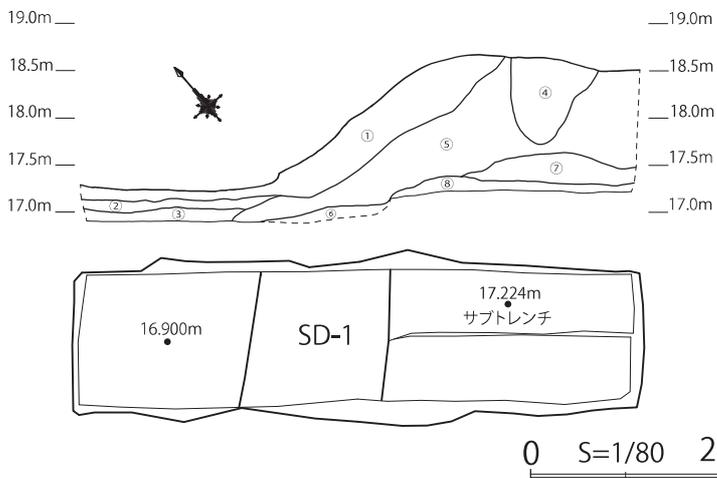


図6 2トレンチ 平面図及び北壁断面図

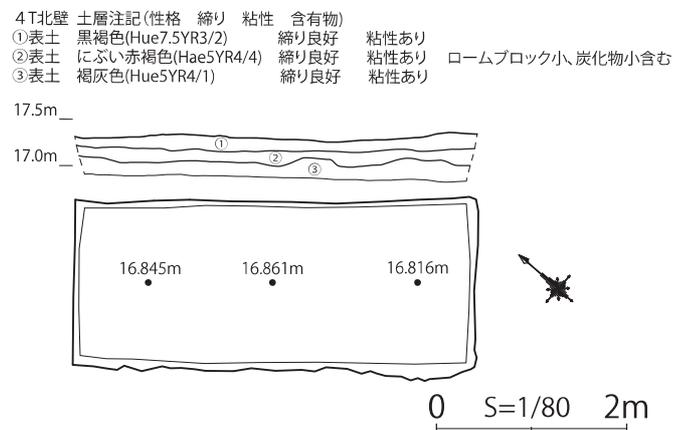


図7 4トレンチ 平面図及び北壁断面図

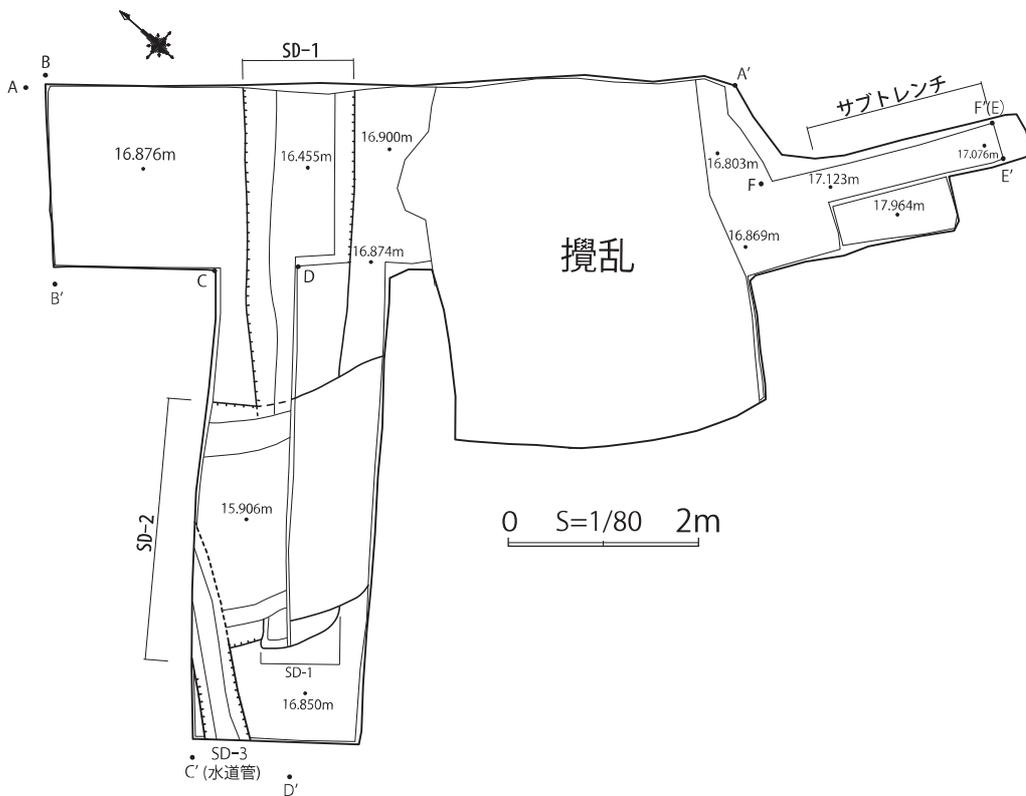


図8 3トレンチ 平面図

3T 拡張区北壁・東壁断面 土層注記(性格 色調 粘性 含有物)

層号	土層注記	性格	色調	粘性	含有物
①	表土	黒褐色(Hue7.5YR3/2)		締りやや弱い	粘性あり
②	墳丘盛土	褐色(Hue10YR4/4)		締りやや強い	粘性あり
③	墳丘盛土	暗褐色(Hue10YR3/4)		締りやや強い	粘性あり
④	墳丘盛土	灰褐色(Hue7.5YR4/2)		締り強い	粘性あり
⑤	墳丘盛土	褐色(Hue7.5YR4/4)		締り強い	粘性あり
⑥	墳丘盛土	褐色(Hue7.5YR4/4)		締り強い	粘性あり
⑦	旧表土	黒褐色(Hue7.5YR3/1)		締り非常に強い	粘性あり
⑧	地山	灰褐色(Hue7.5YR5/2)		締り非常に強い	粘性強い
⑨	地山	灰褐色(Hue7.5YR5/2)		締り強い	粘性強い
⑩	地山	暗褐色(Hue10YR3/3)		締りやや弱い	粘性あり
⑪	地山	にぶい黄褐色(Hue10YR4/3)		締りやや弱い	粘性あり

3T 北壁断面 土層注記(性格 色調 粘性 含有物)

層号	土層注記	性格	色調	粘性	含有物
①	表土	黒褐色(Hue7.5YR3/2)		締り良好	粘性あり
②	表土	赤褐色(Hue5YR4/4)		締り良好	粘性あり
③	表土	褐灰色(Hue5YR4/1)		締り良好	粘性あり
④	SD-1覆土	黒褐色(Hue5YR3/1)		締りあり	粘性やや強い
⑤	SD-1覆土	黒褐色(Hue5YR3/1)		締り弱い	粘性あり
⑥	墳丘崩落土	暗褐色(Hue10YR3/4)		締り良好	粘性あり
⑦	攪乱	暗褐色(Hue10YR3/3)		締り良好	粘性あり
⑧	攪乱	にぶい黄褐色(Hue10YR4/2)		締り弱い	粘性強い

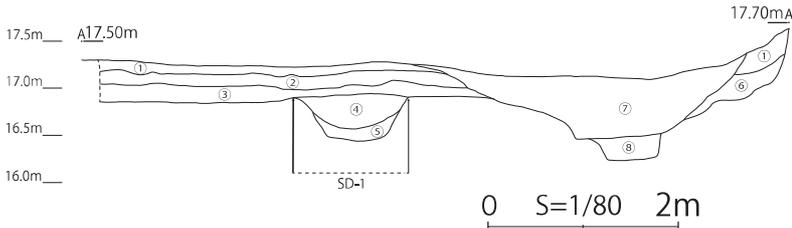


図9 3トレンチ 北壁断面図①

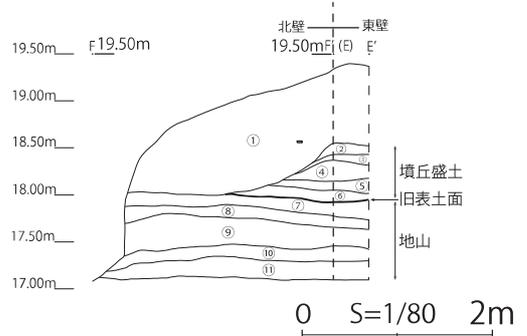


図10 3トレンチ 北壁・東壁断面図

3T 西壁断面 土層注記(性格 色調 締り 粘性 含有物)

層号	土層注記	性格	色調	締り	粘性	含有物
①	表土	黒褐色(Hue7.5YR3/2)		締り良好	粘性あり	
②	表土	にぶい赤褐色(Hue5YR4/4)		締り良好	粘性あり	ロームブロック小・炭化物小含む
③	表土	褐灰色(Hue5YR4/1)		締り良好	粘性あり	
④	SD-2覆土	暗褐色(Hue7.5YR3/3)		締り良好	粘性良好	
⑤	SD-2覆土	黒褐色(Hue7.5YR3/1)		締りやや弱い	粘性やや強い	ロームブロック多量
⑥	SD-2覆土	褐灰色(Hue7.5YR4/1)		締りやや強い	粘性強い	ロームブロック多量
⑦	SD-3覆土	灰色(Hue5Y4/1)		締り弱い	粘性あり	シルト層

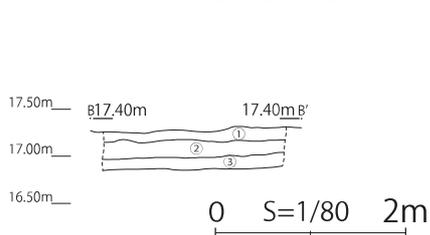


図11 3トレンチ 西壁断面図①

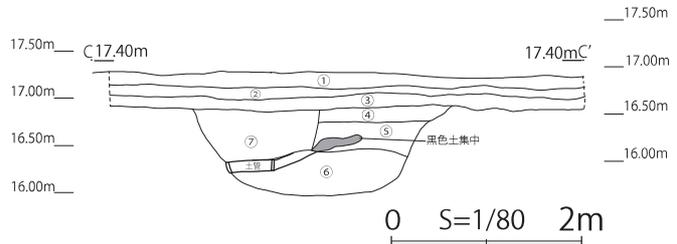


図12 3トレンチ 西壁断面図②

3T 東壁断面 土層注記(性格 締り 粘性 含有物)

層号	土層注記	性格	締り	粘性	含有物
①	SD-1覆土	黒褐色(Hue5YR3/1)	締りあり	粘性やや強い	埴輪多量出土
②	SD-1覆土	黒褐色(Hue5YR3/1)	締り弱い	粘性あり	ロームブロック混じり
③	SD-2覆土	暗褐色(Hue7.5YR3/3)	締り良好	粘性良好	
④	SD-2覆土	黒褐色(Hue7.5YR3/1)	締りやや弱い	粘性やや強い	ロームブロック多量混じり
⑤	SD-2覆土	褐灰色(Hue7.5YR4/1)	締りやや強い	粘性強い	ロームブロック多量混じり

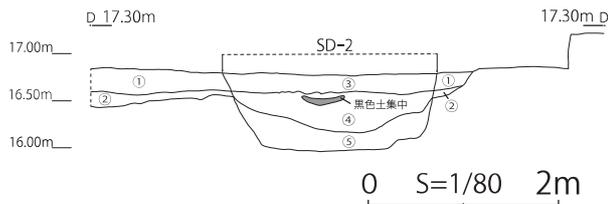


図13 3トレンチ SD-2 東壁断面

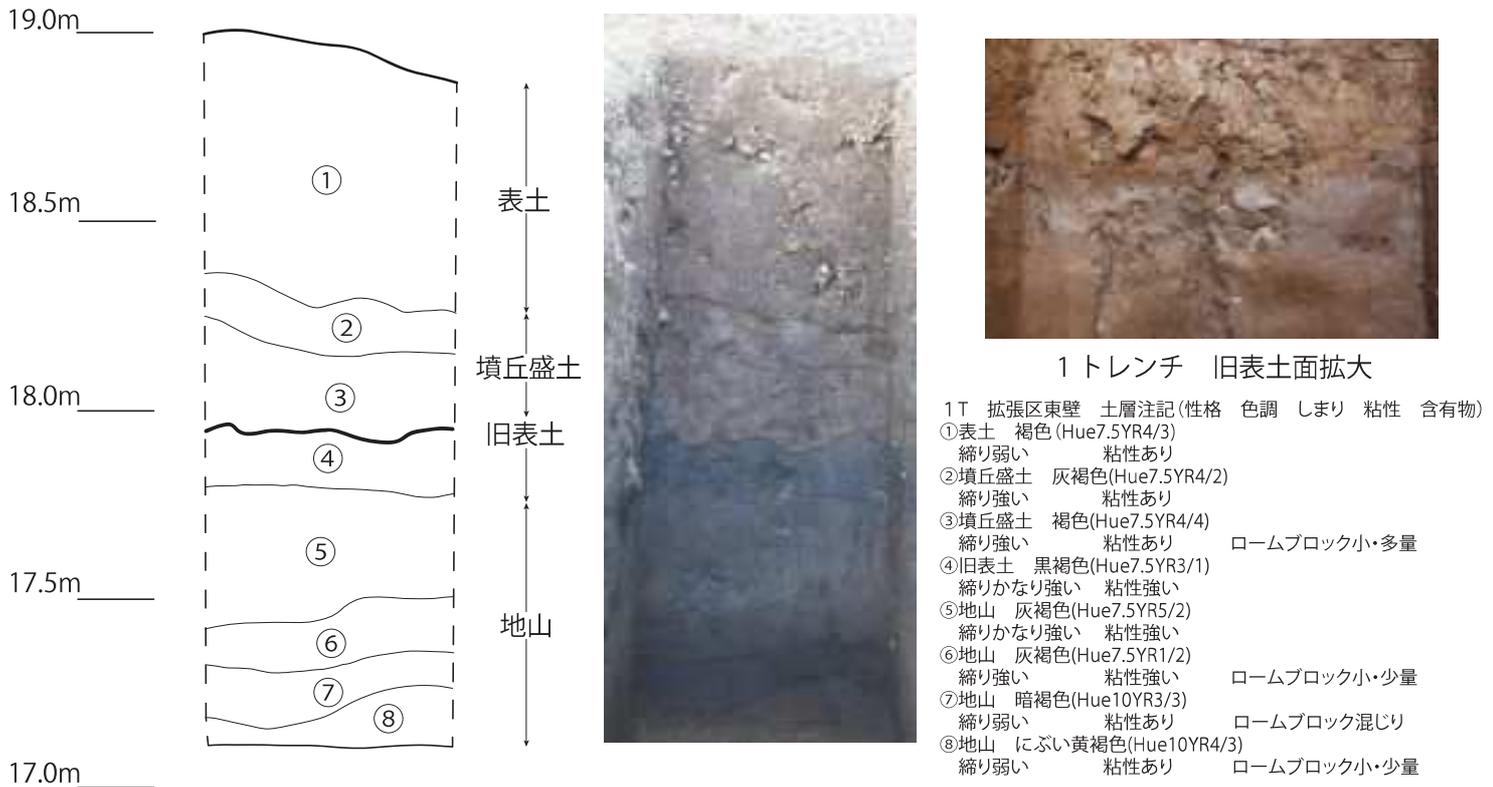


図 14 1 トレンチ 拡張区東壁断面図 (図面 S = 1/20、写真は縮尺不合)

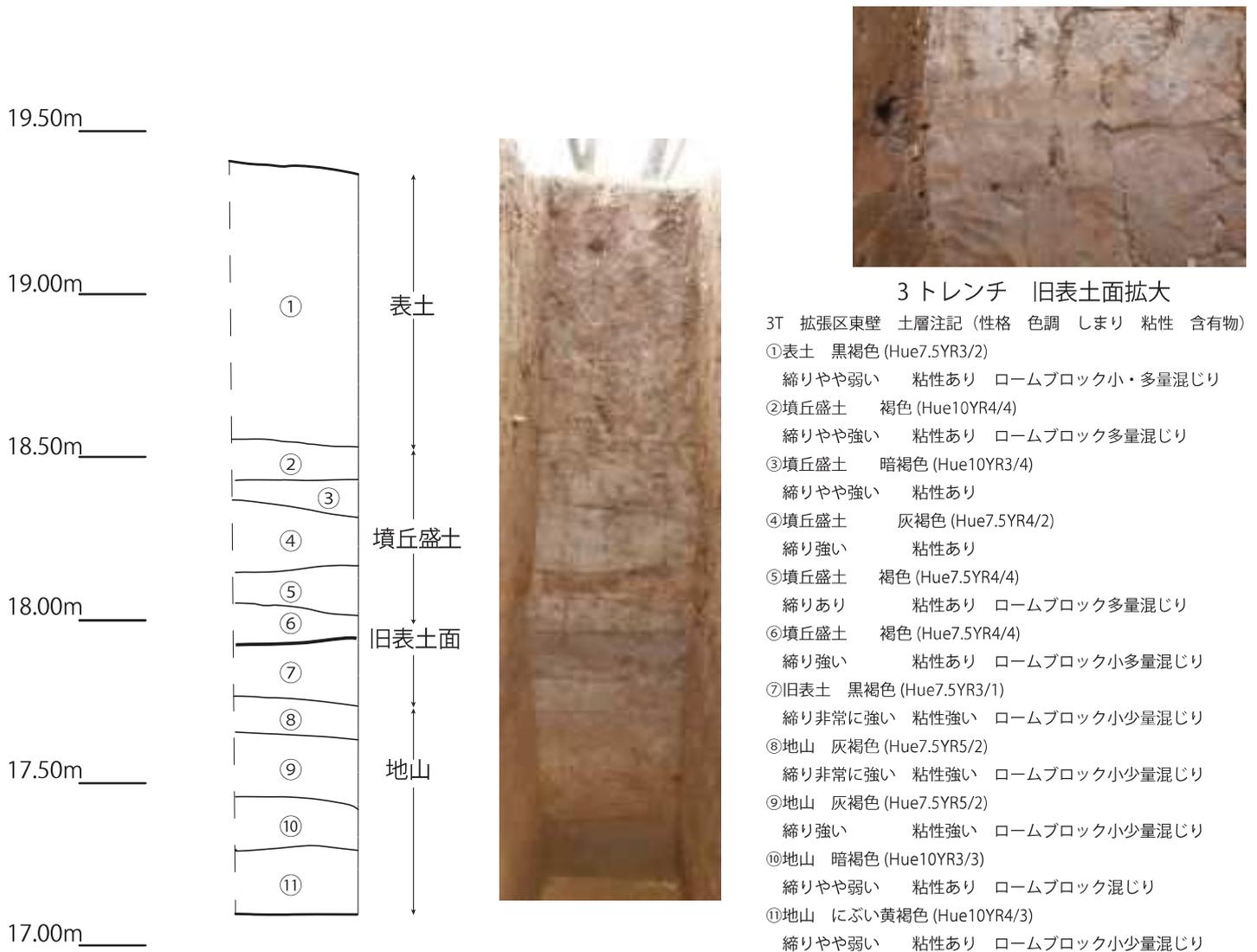


図 15 3 トレンチ 拡張区東壁断面図 (図面 S = 1/20、写真は縮尺不合)

に切られる。

遺物としては、円筒埴輪片多量、瓦少量、角閃石安山岩が出土している。近世瓦が出土しているため、遺構年代の上限としては近世以降になる。

・SD-3 (図5・8) (遺構写真14・16)

SD-3は3・5トレンチにまたがり南北方向に延びる溝状遺構である。溝の上端幅は約40cmであり、下端幅は約20cmである。深さは30cmほどで土管を伴う遺構である。本遺構はSD-2を切る。近代以降に設置された水道管と考えられる。

・SD-4 (図5)

SD-4は5トレンチ墳丘際で確認された浅い溝状遺構である。菖蒲畑境界に設けた溝切りに伴うものと考えられる。上端は約160cmで、下端は約100cmである。

・SK-1 (図4) (遺構写真4)

SK-1は1トレンチ西南部で検出された土坑である。遺構は直径約100cmの円形状を呈し、湧水及び遺構が調査区外に広がるため下端は未確認である。遺物は少量の埴輪や須恵器、大型の緑泥石片岩、角閃石安山岩が出土している。湧水の度合いや覆土の状況から中世・近世の井戸の可能性が有る。

## (2) 内堀・外堀について

本調査においては、トレンチが内堀と外堀の推定ライン上にかかるが、その痕跡を確認することはできなかった。昭和56年度の県教委及び市教委による調査では、内堀・外堀を検出しているが、その底面の標高は約16.9～17.0mになる。

しかし、今回の各トレンチの検出面はその標高値よりも低い約16.8mであり、後述するように旧表土の高さは標高約18.0mで検出面はそこから1.2mほど深いことから、今回の調査エリア内の内堀・外堀は、後世の改変を受け完全に消滅した可能性が高い。

## (3) 墳丘造出しについて

埼玉古墳群で判明している墳丘造出しは、その全てが墳丘の西側に存在する。愛宕山古墳は墳丘造出しの有無は未調査であったが、現況でも後円部西側にわずかな突出部を観察することができ、その存在が示唆されてきた。今回の調査では、その存在を確認するため、推定墳丘造出しの範囲にかかるようにトレンチを設定した(図2)。

調査の結果、後円部西側の土段状の高まりの一部は、上層に近世の瓦が多数含まれることから、近世以降造成されていることが判明し、墳丘造出しの存在を確認することはできなかった。残念ながら存在が確認できないという事前の地形測量結果を裏付けるものとなった。

## (4) 旧表土・墳丘盛土について (図14・15)

今回の調査では、1・3トレンチのサブトレンチの東壁で古墳時代の旧表土及び墳丘盛土が確認された(図14・15)。5トレンチについては、位置的にみて旧表土・墳丘盛土を想定したが、後世の削平のため確認できなかった。

旧表土は黒色土層で標高値は約18.0mであり、その直上には炭化した厚さ0.5cm程の薄い層が視認できた。

埼玉古墳群内の各古墳で検出された旧表土の高さと比較すると、中の山古墳(18.6m)・奥の山古

墳（18.8 m）・鉄砲山古墳（18.5 m）・瓦塚古墳（18.4 m）のように南側の古墳ほど高く、二子山古墳（18.1 m）・愛宕山古墳（18.0 m）・將軍山古墳（18.0 m）・稲荷山古墳（18.0 m）・丸墓山古墳（18.3 m）と北に向かうほど低くなる傾向がある。この傾向による限り、旧地形は南から北にかけて緩やかに傾斜する台地であったと考えられる。

墳丘盛土は、ロームブロックを多量に含む黄褐色土層を基本としている。3トレンチでは黒色系の層とローム混じりの黄色系の層が交互に積まれているような状況が認められ、互層に土を盛っていた。

#### (5) 石田堤について（図4：トレンチ1南壁⑥）

ところで、愛宕山古墳の北方に目を向ければ、丸墓山古墳の墳丘南側階段入口から堤防状の遺構が南へまっすぐ伸びていることがわかっており、愛宕山古墳はその延長上に位置している。過去の航空写真にもこの堤は明瞭に写っている。これは戦国時代、忍城の戦いの際に石田三成が水攻めのために築いた堤とされ、現在では石田堤と呼ばれる。全長28kmとも14kmとも言われ、鴻巣市袋と行田市堤根に一部が現存している。近年では行田市堤根の北方、永徳寺の境内において石田堤の盛土が見つかっている。堤の盛土中には埴輪や土器が含まれており、周辺の古墳から土が運ばれたと推定される。現に三成は、古墳や微高地を繋ぎ合わせる形で堤を造ったとされる。

愛宕山古墳の後円部西側の土段状の高まりは、上層からの出土遺物により近世以降の造成の結果と結論付けられる。ただし土段状の高まりの下層（図4：トレンチ1南壁⑥）は、しまりが非常に強く、近世の造成土とは明らかに性質が異なる。しかし、この土層からは埴輪や土器が含まれるため古墳時代に属する構造物でないことは確実である。土段は大きく二回にわたって造成された結果であると考えられる。下層はSD-1掘削、埋没以降に造成されており、年代に矛盾点はない。

愛宕山古墳が石田堤の延長上に位置する点、墳丘西側に不自然な土段をもち、古墳時代以降近世以前の造成が認められる点を考慮すると、この造成は忍城水攻めの際に改変を受けた結果である可能性がある。堤を築く際、愛宕山古墳の土を利用し、あるいは墳丘自体を堤に利用する過程で、不自然な土段を発生させたとも推測できる。愛宕山古墳以南の堤の展開状況は不明であるが、永徳寺の境内で確認された堤に接続するものと考えられる。狭小なトレンチからの検出であり可能性の域を出るものではないが、今後石田堤の検出例が増え、その位置や形状、造成方法についての検証の進展が望まれる。

### 3-2. 出土遺物

令和3年度の調査の出土遺物は、テンバコで13箱出土しており、その内訳は埴輪5箱、近世瓦3箱、石材2箱、須恵器1箱、近世陶磁器1箱、被熱を受けた粘土塊・土管1箱となっている。

主要な遺物を抽出し、その特徴を表1にまとめた。埴輪は口縁部・突帯・透孔・底部が残存しているものを抽出し、須恵器は主に残りの良い破片や胴部以外の部位を含む個体を抽出した。

#### (1) 埴輪

##### ・円筒埴輪（遺物写真1～36）

出土した円筒埴輪は、全体的に摩耗が激しいが、SD-1出土に関しては摩耗が少ない。現位置を保った状態で出土した埴輪は確認できなかった。今回出土した中では、段数が確認できる個体はなかったが、過去の調査結果と、また推定される径の大きさから、3条突帯4段構成のものが主体と考えられる。全体的な傾向としては、色調は橙色で砂粒を多量に含むものが多く、突帯断面が台形状にな

る個体が多い(10~32)。昭和56年度には、後円部東側が調査されているが、そこで出土した個体と同タイプのもの(B類)とみられる。透孔は残存部分から形状が確認できるものとしては、円形か楕円形いずれかになるとみられる(10~20)。

36は残存部分からも大型品になる可能性がある。愛宕山古墳周辺は、忍藩の菩提寺であった天祥寺の門前であったことから、他の古墳の墳丘を用いた整地が行われた可能性があるという(関2018)。そのことを踏まえれば、この個体は別の古墳からの混入の可能性がある。

#### ・形象埴輪(遺物写真59~67)

埼玉古墳群では、形象埴輪は主に墳丘西側からの出土が多いが、愛宕山古墳においては、墳丘東側で出土し、例外的に東側に形象埴輪が配置されていた可能性が考えられてきた。今回の調査では、点数が少ないものの、墳丘西側においても形象埴輪の存在が確認されることになった。種別や部位が推測できるものは59・62・63のみで、それ以外は不明である。

59は動物埴輪の脚部と推定される。60は厚みが3cmほどと分厚く、底部と推測される面が残存する。61は外面に3cmほどの突起部をもち、破断面に小穴が確認される。62は湾曲がなく直立的な形状をもち、生存面にゆるやかなカーブがみられ、蓋形埴輪の立ち飾り部の破片と考えられる。63は4面全てが生きており、蓋形埴輪の立ち飾り部先端の破片と考えられる。64は厚みの最大部分が4cmほどになる分厚い形状をもつ。65は湾曲がなく板状の形態である。66は径が小さく小型の筒状になると考えられ、内面に粘土が貼り付けられている。67は粘土の貼り付け痕が認められる小片であり、外面にハケ目と平行して一条の線刻が施される。

### (2) 須恵器(遺物写真37~52)

須恵器に関しては、目算によるが2・3トレンチからの出土量が全体の8割を占め、その中でも特に3トレンチのSD-1からの出土が多い。

埼玉古墳群の墳丘造出しは、後円部西側くびれ部に設けられる傾向があり、これまでの発掘調査でも葬送儀礼に伴う須恵器が多く出土していることを踏まえれば(稲荷山古墳・瓦塚古墳・奥の山古墳・将軍山古墳)、2・3トレンチにおける須恵器の出土の集中は、付近に墳丘造出しが存在したことを示唆するものである。

須恵器は、器種の殆どが甕と予想され、技法や胎土の観点からも、複数の産地からの搬入が考えられる。51は甕の頸部であり、凹線に挟まれた段に櫛描波状文をもつ個体である。

### (3) 石材

1~3トレンチを中心に緑泥石片岩・角閃石安山岩が出土した。個体としては、斫ったような破片が多いが、長さ50cm・幅20cm弱の大型のものも混在する。これら石材は、ともに埼玉古墳群では横穴式石室の石材に使用されているものであり、緑泥石片岩は将軍山古墳・鉄砲山古墳で天井石に使用されており、角閃石安山岩は鉄砲山古墳の側壁や閉塞石での使用が確認されている。

愛宕山古墳は、事前に行われたGPR探査によって、後円部東側で南に向けて開口する横穴式石室が存在する可能性が指摘されている。今回の出土石材が愛宕山古墳の埋葬施設を構成していたか確認はないが、主体部の形態が横穴式石室である可能性がさらに高まった。

出土した石材は墳裾・内堀・外堀の範囲になるため、古墳のそばまで石材を持ち込み最終的な仕上げをした際に出た石材の破片か、盗掘などの改変を受けて破壊された石材の破片かは、両様の可能性が考えられる。

#### (4) 古墳時代以外の遺物

##### ・縄文土器（遺物写真 53・54）

今回の調査では、縄文土器が2点出土している。53は刻列をもつ隆帯がめぐり、斜降する列点文が施された口縁部である。金雲母を多量に含む胎土であることから縄文時代中期に属する阿玉台式である。54は薄手の土器の口縁部である。内湾する形態で、2条1単位の沈線が2組横走する。

##### ・平安時代の須恵器（遺物写真 55）

55はSD-1から出土した須恵器杯の底部である。体部は残存部の状況から大きく開くとみられる。底部切り離しは、回転糸切り後未調整となっている。内底径は計測値が5.5cmで、6cmを切ることから鳩山編年Ⅸ期～Ⅹ期（9世紀末～10世紀）と考えられる。胎土には白色針状物質を含むことから南比企産のものとみられる。

##### ・中世陶器（遺物写真 56～58）

56は中世陶器の甕の底部である。外面は粗いハケのような工具で縦方向にケズリ仕上げがなされており、内面は摩耗が激しいことから播鉢として使用されたものと考えられる。常滑産か。

57は中世陶器の甕の胴部である。外面には横方向に連続する押印文がつくことから、鎌倉～室町期の常滑産のものである。

58は在地産瓦質片口鉢の口縁部である。口縁部が丸みをもつ形状であることから室町期のものか。

##### ・近世瓦

今回の調査では、1・2トレンチの近世盛土内を中心に多量の瓦が出土した。いずれも近世以降の瓦とみられ、軒瓦・棧瓦・鬼瓦・冠瓦・熨斗瓦など多岐にわたる。

愛宕山古墳は、その名称からもわかるように、墳丘上に村社として愛宕社が置かれていたが（『武蔵国郡村誌』1882年）、今回出土した瓦は大型の鬼瓦も含まれており、大規模な建物をもたなかった愛宕社に属するものとは考えにくい。

愛宕山古墳に隣接する天祥寺は、文政6年（1823）に桑名藩主の奥平松平家が忍藩に国替えになり、それに伴って移されてきた寺院である。かつては大伽藍をほこったが、明治6年の廃仏毀釈により、庫裡だけを残して全て取り壊しになったという（行田市1964）。近世瓦が多く出土した1・2トレンチは、この天祥寺に接していることから、出土した大型の瓦もこうした大伽藍の主要建物の屋根に葺かれていたと考えられ、近代以前の天祥寺に属するものと推測される。



令和3年度愛宕山古墳発掘調査出土瓦

## 4 おわりに

令和3年度愛宕山古墳の発掘調査の成果は下記の点に集約される。

- ①愛宕山古墳西側の外堀・内堀は、後世に大きな改変を受け、残存しないことが明らかになった。
- ②墳丘造出しと考えられていた土段状の構造は、近世の盛土であり、遺構として墳丘造出しを確認することはできなかった。3次元測量の結果が示すように墳丘造出しは裾も含めて消滅している可能性が高い。2・3トレンチでは須恵器が集中して出土したが、それはかつて付近に墳丘造出しが存在した可能性を示唆するものである。
- ③墳丘面の土段状の高まりの下層からは、埴輪や土器を含む締まりの良い土層を検出した。この土層は戦国時代に築かれた石田堤に関係する構造物である可能性がある。
- ④1・3トレンチで旧表土を確認することができた。標高値は約18.0mである。他の古墳の旧表土値を勘案すると、微妙な凹凸はあるものの埼玉古墳群の旧地形は全体的に南から北に向かって緩やかに傾斜する台地であったと考えられる。
- ⑤GPR探査の結果、横穴式石室の存在と思しき反応を検出したが、1～3トレンチで緑泥石片岩・角閃石安山岩が出土したことにより、その存在の可能性がより高まった。

このように、今回の調査はまさに事前に行われた3次元測量やGPR調査の結果を裏付けるものとなった。外堀・内堀が残存していなかったエリアに関しては、他の調査区で検出された情報をもとに推定線を引き、整備事業を進めていくことになるだろう。

今回報告した内容は、整理作業を進めていく中でのあくまでも中間報告であり、暫定的なものである。令和3年度の調査は、愛宕山古墳発掘調査3か年計画の初年度であり、その調査結果は、最終的には今後行われる調査とあわせて総合的に解釈する必要がある。

しかし、発掘調査の情報は、何らかの形で記録して遺していかなければ薄れていくものなので、今回のように概報という形であっても、情報を遺していくことは必要な作業であろう。今回の概報が発掘調査3か年計画終了後の整理作業・整備事業の一助にでもなれば、また発掘調査の結果を広く報知することにつながれば幸いである。

### 参考文献

- 行田市 1964 『行田市史』
- 行田市教育委員会 1994 『行田市文化財調査報告書 第31集 愛宕山古墳・天祥寺裏古墳・二子山古墳・中の山古墳・陣場遺跡(6・7次)』
- 埼玉県立さきたま資料館 1985 『埼玉古墳群発掘調査報告書 第3集 愛宕山古墳』埼玉県教育委員会
- 城倉正祥 2011 「埼玉古墳群の埴輪編年」『埼玉県立史跡の博物館研究紀要』5号
- 関義則 2018 「総括—埼玉古墳群の学術的評価と歴史的意義—」『史跡埼玉古墳群 総括報告書I』埼玉県教育委員会
- 早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 2022 『早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 デジタル調査概報第4冊：埼玉県行田市 埼玉愛宕山古墳の測量・GPR調査第4集』

表1 遺物観察表

No.	種別	出土地	特記事項	色調(外面)	焼成	含有物
1	円筒埴輪口縁部	1T 表土	口縁端部は平坦。外面タテハケ後、口縁のみヨコナデ。内面ナナメハケ後、口縁のみヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐色	良好	砂粒多量
2	円筒埴輪口縁部	1T 表土	口縁端部は略平坦でやや丸みを帯びる。外面タテハケ後、口縁のみヨコナデ。内面ヨコハケ後、口縁のみヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐色	良好	砂粒多量
3	円筒埴輪口縁部	1T 表土	口縁端部は平坦。外面タテハケ後、口縁のみヨコナデ。内面ナナメハケ後、口縁のみヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐色	良好	砂粒多量
4	円筒埴輪口縁部	3T SD-1	口縁端部は凹状。外面ヨコナデ。内面ヨコハケ、口縁のみヨコナデ。	2.5YR4/6 赤褐色	良好	
5	円筒埴輪口縁部	1T 表土	口縁端部は略平坦でやや丸みを帯びる。外面タテハケ後、口縁のみヨコナデ。内面ナナメハケ後、口縁のみヨコナデ。	5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量
6	円筒埴輪口縁部	1T 表土	口縁端部は凹状。外面タテハケ後、口縁のみヨコナデ。内面ヨコハケ後、口縁のみヨコナデ。	10YR7/6 明黄褐色	良好	白色砂粒少量
7	円筒埴輪口縁部	3T SD-2	口縁端部は平坦。外面はタテハケ後、口縁のみヨコナデ。内面ナナメハケ後、口縁のみヨコナデ。	10YR7/6 明黄褐色	良好	砂粒多量
8	円筒埴輪口縁部	3T SD-1	口縁端部は平坦。外面タテハケ後、口縁のみヨコナデ。内面ナナメハケ後、口縁のみヨコナデ。	2.5Y5/2 暗灰黄色	良好	砂粒多量
9	円筒埴輪口縁部	3T SD-1	口縁端部は略平坦でやや丸みを帯びる。外面タテハケ後、口縁のみヨコナデ。内面ナナメハケ後、口縁のみヨコナデ。	2.5Y5/2 暗灰黄色	良好	砂粒多量
10	円筒埴輪突帯部(透孔あり)	1T 表土	隅丸方形透孔か。突帯は幅広い台形状。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量
11	円筒埴輪突帯部(透孔あり)	1T 表土	円形透孔。突帯は幅広い台形状。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	5YR4/6 赤褐色	良好	砂粒多量
12	円筒埴輪突帯部(透孔あり)	1T SD-1	円形透孔。突帯は幅広い台形状。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐色	良好	砂粒多量
13	円筒埴輪突帯部(透孔あり)	2T 表土	円形透孔。突帯は幅広い台形状。外面胴部はタテハケ。内面ナナメナデ。突帯部はヨコナデ。	5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量
14	円筒埴輪突帯部(透孔あり)	1T 表土	円形透孔。突帯は幅広い台形状。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐色	良好	砂粒多量
15	円筒埴輪突帯部(透孔あり)	3T SD-2	透孔(形状不明)。突帯はゆるやかな三角形状。外面胴部はタテハケ。内面は透孔付近はナデ、それ以外はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量
16	円筒埴輪突帯部(透孔あり)	3T SD-1	円形透孔。突帯は台形状。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐色	良好	砂粒多量
17	円筒埴輪突帯部(透孔あり)	3T SD-1	透孔(形状不明)。突帯は幅広い台形状。外面胴部はタテハケ。内面ナデ。突帯部はヨコナデ。	7.5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量
18	円筒埴輪突帯部(透孔あり)	1T SD-1	円形透孔。突帯はつぶれたM字状。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部は粗雑なヨコナデ。	5YR4/6 赤褐色	良好	砂粒中量
19	円筒埴輪突帯部(透孔あり)	3T SD-2	透孔(形状不明)。突帯は台形状。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量
20	円筒埴輪突帯部(透孔あり)	3T SD-2	円形透孔。突帯はゆるやかな三角形。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	10YR5/3 にぶい黄褐色	良好	砂粒多量
21	円筒埴輪突帯部	3T SD-2	突帯は台形状。外面胴部はタテハケ。内面はナナメナデ。突帯部はヨコナデ。	7.5YR5/4 にぶい褐色	良好	砂粒多量
22	円筒埴輪突帯部	1T 表土	突帯は台形状。外面胴部はタテハケ。内面はナデ。突帯部はヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐色	良好	砂粒多量
23	円筒埴輪突帯部	1T 表土	突帯は台形状。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐色	良好	砂粒多量
24	円筒埴輪突帯部	3T SD-1	突帯は偏平なM字形。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量
25	円筒埴輪突帯部	3T SD-1	突帯は台形状。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量
26	円筒埴輪突帯部	3T SD-1	突帯は偏平なM字形。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	5YR6/6 橙色	良好	砂粒中量
27	円筒埴輪突帯部	3T SD-1	突帯は台形状。外面胴部はタテハケ。内面はヨコハケ。突帯部はヨコナデ。	7.5YR5/3 にぶい褐色	良好	砂粒多量
28	円筒埴輪突帯部	3T SD-1	突帯は台形状。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	7.5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量
29	円筒埴輪突帯部	1T SD-1	突帯は偏平なM字形。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	7.5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量
30	円筒埴輪突帯部	1T 表土	突帯は台形状。外面胴部はタテハケ。内面はナナメハケ。突帯部はヨコナデ。	7.5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量
31	円筒埴輪突帯部	3T SD-2	突帯はゆるやかな三角形。突帯直下に沈線が横走。外面胴部はタテハケ。内面はナデ。突帯部はヨコナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	砂粒多量
32	円筒埴輪突帯部	2T 表土	突帯は台形状。外面胴部はタテハケ。内面は摩耗が激しく不明。突帯部はヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄褐色	良好	砂粒微量
33	円筒埴輪底部	3T SD-2	底部に圧痕あり。外面はタテハケ。内面はナナメナデ。	7.5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量
34	円筒埴輪底部	3T SD-1	外面はタテハケ。内面はナナメナデ。	7.5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量
35	円筒埴輪底部	3T SD-1	外面はタテハケ。内面はナナメナデ。	10YR6/4 にぶい黄褐色	良好	砂粒多量

No.	種別	出土地	特記事項	色調 (外面)	焼成	含有物
36	円筒埴輪胴部	1T 表土	外面はタテハケ。内面はナナメハケ。大型品。	7.5YR6/6 橙色	良好	砂粒微量
37	須恵器胴部	1T 表土	内面同心円痕をナデ消す。外面平行タタキ目。	7.5Y6/1 灰色	堅緻	
38	須恵器胴部	3T 表土	内面同心円痕、外面タタキ目。	10Y6/1 灰色	堅緻	白色砂粒微量
39	須恵器胴部	3T SD-1	内面同心円痕をナデ消す。外面タタキ後ナデ、カキ目。	7.5Y6/1 灰色	堅緻	白色砂粒微量
40	須恵器胴部	2T 表土	内面同心円痕、外面平行タタキ目。灰褐色状の胎土。	N.5/ 灰色	堅緻	
41	須恵器胴部	3T SD-1	内面同心円痕。外面タタキ調整後、カキ目。	N.4/ 灰色	堅緻	白色砂粒少量
42	須恵器胴部	2T 表土	内面同心円痕、外面平行タタキ目。	10Y6/1 灰色	堅緻	白色粒子微量
43	須恵器胴部	3T SD-1	内面同心円痕、外面平行タタキ目。	N.3/ 暗灰色	堅緻	白色砂粒少量
44	須恵器胴部	3T SD-1	内面同心円痕、外面平行タタキ目。	N.5/ 灰色	堅緻	白色粒子少量
45	須恵器胴部	2T SD-1	胴部上位破片、内面同心円痕、外面平行タタキ目。	7.5Y6/1 灰色	堅緻	砂粒少量
46	須恵器胴部	1T 表土	内面同心円痕、外面平行タタキ目。	10Y6/1 灰色	堅緻	白色粒子少量
47	須恵器胴部	3T SD-1	内面同心円痕、外面タタキ目。	N.6/1 灰色	堅緻	白色砂粒微量
48	須恵器頸部～胴上部	3T SD-1	胴部内面は同心円痕をナデ消し、外面は平行タタキ目。頸部内外はナデ調整。	10Y6/1 灰色	堅緻	白色粒子微量
49	須恵器胴部	3T SD-1	内面同心円痕をナデ消す。外面平行タタキ目。	10Y6/1 灰色	堅緻	白色粒子微量
50	陶器胴部	1T 表土	内外ナデ。外面に釉がかかる。	10YR6/3 にぶい黄橙色	堅緻	
51	須恵器頸部	3T SD-1	凹線2条が横走、その区画内に櫛描波状文を施す。内面はヨコナデ。	2.5GY5/1 オリーブ灰色	堅緻	白色砂粒少量
52	須恵器胴部	1T 表土	内面ナデ。外面に自然釉。	7.5Y5/1 灰色	堅緻	砂粒微量
53	縄文土器	3T 表土	口縁部。内面ナデ。口縁端部に刻列をもつ隆帯。	5YR6/6 橙色	良好	金雲母多量 砂粒中量
54	縄文土器	5T SD-3	口縁部。外面は2条1単位の沈線が2つ横走。内面ナデ。	2.5Y5/3 暗灰黄色	良好	砂粒多量
55	須恵器坏底部	3T SD-1	回転糸切痕。南比企産か(平安期)。	2.5GY5/1 オリーブ灰色	堅緻	白色砂粒少量 白色針状物質多量
56	陶器底部	1T 表土	外面ケズリ(ハケメ痕あり)、内面は擦り器として使用した摩耗痕あり。常滑産。	5Y5/1 灰色	堅緻	
57	陶器胴部	1T 表土	甕。外面押印文、内面ナデ。常滑産(鎌倉～室町期)。	5YR5/3 にぶい赤褐色	堅緻	砂粒微量
58	在地産瓦質片口鉢	1T 表土	残存は口縁部。内外クロナデ。室町期。	N.5/ 灰色	堅緻	白色粒子微量
59	形象埴輪(脚部)	1T SD-1	馬形などの脚部の可能性が高いか。外面タテハケ、内面ナデ。	5YR5/6 明赤褐色	良好	砂粒多量 白色砂粒少量
60	形象埴輪(不明)	2T 表土	外面ハケ、内面ナデ。厚みが2～3cmほどあり、分厚い。	2.5YR4/6 赤褐色	良好	白色粒少量
61	形象埴輪(不明)	3T SD-1	外面ナデ、内面ハケ。破片面に小穴あり。外面は突起状に盛り上がる。	5YR7/6 橙色	良好	砂粒多量 白色砂粒少量
62	形象埴輪(蓋形)	2T SD-1	内外ナデ。	5YR5/6 明赤褐色	良好	砂粒多量 白色砂粒少量
63	形象埴輪(蓋形)	1T SD-1	4面すべてナデ。	5YR5/6 明赤褐色	良好	砂粒多量 白色砂粒少量
64	形象埴輪(不明)	2T 表土	外面ナデ、内面ハケ。	5YR6/8 橙色	良好	砂粒多量 白色砂粒少量
65	形象埴輪(不明)	3T SD-1	内外ハケ。直線的な形状。	5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量 白色砂粒少量
66	形象埴輪(不明)	3T SD-1	外面タテハケ。内面ナデ。	5YR6/6 橙色	良好	砂粒多量 白色砂粒少量
67	形象埴輪(不明)	3T 表土	外面に線刻あり。外面ハケメ後、ナデ。内面ナデ。	5YR5/6 明赤褐色	良好	砂粒多量



1. 1 トレンチ完掘 (西から)



2. 2 トレンチ全景 (西から)



3. 1 トレンチ SD-1 完掘(南西から)



4. 1 トレンチ SK-1 半裁状況(北から)



5. 1 トレンチ SD-1 形象埴輪出土(南から)



6. 2 トレンチ SD-1 検出(南から)



7. 3 トレンチ完掘 (西から)



8. 4 トレンチ完掘 (南から)



9. 5 トレンチ完掘 (南西から)



10. 3 トレンチ SD-1 検出(南から)



11. 3 トレンチ SD-1・2 検出 (南西から)



12. 3 トレンチ SD-1 南端 (西から)



13. 3 トレンチ SD-2 断面(東から)



14. 3 トレンチ SD-3 水道管 (東から)



15. 3 トレンチ拡張区 (西から)



16. 5 トレンチ SD-3 水道管 (南から)



17. 5 トレンチ東壁 (西から)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



12



10



11



15



13



14



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



29



28



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52





53



54



55



56



57



58



59



60



61



62



63



64



65



66



67